

ペット動物が家族の心身の健康におよぼす影響 (1)

ペット動物に対する関係性・態度・感情の分析¹⁾

大久保 純一郎

近年、日本においても動物介在療法、動物介在活動ということばが使われるようになり、心理学的な治療や、こころのケアを目的として動物を用いた様々な活動が行われるようになってきた。また、ペットとして飼われている動物と人間の関係についても関心が高まり、ペットの存在が人の心身の健康によい影響を与えるという報告もされるようになってきた。その多くは、「事例報告であり、調査研究はごくわずかである」と遠藤ら (2000) は述べている。

Siegel (1990) は、1034人の調査対象に、3回 (10か月間) にわたり電話面接を行った。ペットを所有している者は、病院利用回数が有意に少ないことがわかった。その一方、ペットの有無と抑うつ気分には相関がないことを示した。また、Straede & Gates (1993) は、ペットの有無と心身の健康度を検討し、一般的健康度とGHQの測定指標により、ペット飼育者の方が健康であると述べている。これらの研究では、身体的な健康度についてはペットの飼育の効果が見られたが、心理的な健康については明らかでない。

遠藤ら (2000) は、ペットの存在と心身の健康に関与する重要な要因として、人とペットの関係性をあげ、「ペットとの情緒的一体感尺度」を作成した。この尺度は、ペット動物と人間との関係性を測定する優れた尺度であるが、対象はペットを飼育しているものであり、非飼育者の動物への関係性については評価できないといえる。

そこで、本研究は、大学生を対象と、ペットの存在と心身の健康度の関連性について検討することを目的として行った。さらに、動物に対する否定的な感情も含め、ペット動物に対する態度や感情を評価し、その結果と心身の健康について検討した。また、動物との関係性については、質問紙チェックリストとともに、投影法による指標も用いた。

方 法

被験者

近畿圏の大学に所属する2～4回生のうち、心理系の専門科目を受講している学生107名を被験者とした (男性39名、女性68名: ペット動物を飼育している者、45名)。

1) 本論文は、2004年11月、日本健康心理学会第17回大会において報告されたものを加筆訂正したものです。

研究材料

本研究では、以下のテストと質問紙を使って行った。

1) 家族イメージ法 (Family Image Technique : F I T : 亀口, 1999)

これは、亀口 (1999) が開発した投影法の心理学的家族アセスメント法である。この方法は、個々の家族が自分たちの家族にどのような視覚的イメージを抱いているかを明らかにするものである。具体的には、五種類の円形のシールを個々の家族メンバーに見立てて、正方形の枠内に、家族が一緒にいる場面を思い浮かべながら配置するように被験者に求めるものである。ペット動物を飼っている人には、ペット動物も家族に含めてシールの配置を行うよう教示した。指標として、以下の項目を用いた。

(1) 夫婦シールの4項目のそれぞれの尺度

- a1: 夫婦の位置関係 {夫左:妻右、妻左:夫右、夫上:妻下、妻上:夫下、斜め}
- a2: 向き {向き合い、平行、直角、相反}
- a3: 結びつき、{強い、普通、弱い}
- a4: パワー {強い、普通、弱い}

(2) 子シールの3項目のそれぞれの尺度

- b1: 夫婦軸への向き {向き合い、平行、直角、相反}
- b2: 夫婦軸との関係 {上位置、同じ、下位置}
- b3: パワー {強い、普通、弱い}

(3) 家族イメージ法全体の2項目のそれぞれの尺度

- c1: 夫婦間距離と親子間距離 {1.0以下、1.0以上}

※今回は、夫婦間距離を「夫—妻」、親子間距離を「妻—子ども」とした。

- c2: 占有率 {狭い (30%未満)、ほどほど (30~50%未満)、広い (50%以上)}。

(4) ペット動物と本人の関係性について

- p1: ペット動物と本人の位置関係
- p2: ペット動物と本人の向き
- p3: ペット動物と本人の結びつき
- p4: ペット動物のパワー

2) KDCL短縮版 (大学生用) :

心身の健康度を測定するため、27項目からなるKDCL (葉賀, 1988) 学生用短縮版 (葉賀, 2000) を用いた。本尺度は、「はい」「いいえ」の2件法で、「はい」を1点、「いいえ」を0点として得点化した。

3) ペット動物に対する感情の質問紙 (対動物態度尺度)

ペット動物に対する感情の質問は、「ペット動物についてどう感じるか」に関するもの質問で、肯定的なものも否定的なものも含めて18項目からなるものである (表1参照)。本尺度は、「そのとおりである」「どちらかといえばそう」「どちらかといえば違う」「違う」の4件法で行った。

表1 対動物態度尺度の項目とその因子分析結果

		因子		
		1	2	3
		不潔感	肯定的感情	行動的嫌悪
5.	毛が抜けて汚い感じがする。	0.821	-0.114	0.196
6.	人間をなめたりするので気持ち悪い。	0.732	-0.211	-0.042
10.	細菌かなにかがいて不潔だと思う。	0.697	-0.116	0.343
11.	よだれを流したりするので汚らしい。	0.682	-0.007	0.541
8.	臭いので嫌だ。	0.497	-0.247	0.485
1.	咬まれたりして、けがをしたことがあるので怖い。	0.466	-0.189	0.082
7.	あいきょうがある。	-0.170	0.752	-0.001
12.	かわいいので好きだ。	-0.312	0.735	-0.003
9.	こころが癒される。	-0.129	0.715	-0.250
2.	動物には興味がない。	0.406	-0.688	0.091
13.	人間に忠実である。	0.020	0.638	-0.247
4.	自分の気持ちをよくわかってくれる。	-0.045	0.500	-0.489
17.	世話をするのが面倒だ。	0.232	-0.201	0.542
14.	自分勝手である。	0.031	0.004	0.479
16.	吠えたり、鳴いたりするのがうるさい。	0.299	-0.237	0.451

因子抽出法：主因子法 回転法：Kaiserの正規化を伴うバリマックス法

4) ペット動物に対して飼い主としてどのように感じているかの質問紙（飼い主感情尺度）

「ペット動物の飼い主としてどのようなことを日ごろ感じているか」に関する19項目からなる質問で（表1）、ペットを飼っているものにのみ回答してもらった。この質問紙も対動物感情尺度と同様の4段階尺度で回答を求めた。

表2 飼い主感情尺度

1.	ペット動物のためなら、たいていのことは我慢できる
2.	ペット動物をみていると、自分のペットというよりは別の一人の人間という感じがする
3.	ペット動物のためなら、どんなことでもするつもりでいる
4.	ペット動物が赤ちゃんだった頃が、たまらなく懐かしい
5.	わがペットといえども、自分の思いどおりにいかないことも多いものだと思う
6.	ペット動物に対しては、飼い主というよりも共に生活している仲間という気持ちが強い
7.	飼い主の自分がいちばん良いと思う教育をペット動物に与えたい
8.	ペット動物は自分の体の一部のように思う
9.	いつまでもあどけなく子どもっぽくいてほしい
10.	飼い主がペット動物のためと思ってすることが、本当にペット動物のためになっているか疑問である
11.	飼い主であることが好きである
12.	ペットの世話に携わっているあいだに、世の中からとり残されていくように思う
13.	自分の関心がペット動物にばかり向いて視野が狭くなる
14.	飼い主であることに生きがいを感じている
15.	飼い主であるために自分の行動がかなり制限されている
16.	母飼い主であることに充実感を感じる
17.	ペット動物の飼い主であることは楽しい
18.	ペット動物の飼い主として、苦労している
19.	ペット動物の飼い主であることは悩みの種である

手続き

本調査は、大学での授業において集団的に行った。

結果

ペット動物の種類

飼育動物の種類は図1のとおりであり、犬が86.7%で最も多かった。次に猫が8.9%で、その他の動物は4.4%だった。

家族イメージ法 (FIT) の結果

ペット動物の有無とFIT指標 (a1-c2) の関連性について検討したところ、ペット動物の有無はb3,c1,c2の指標に影響をおよぼしていることが見いだされた (図1, 2, 3)。

χ^2 分析を行ったところ、それぞれ比の差は有意であった。

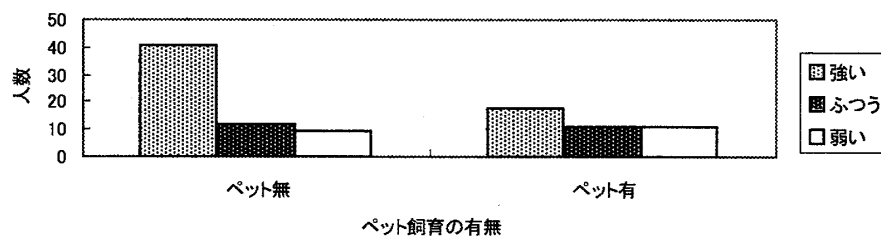


図1 子どものパワーとペット飼育の関連性

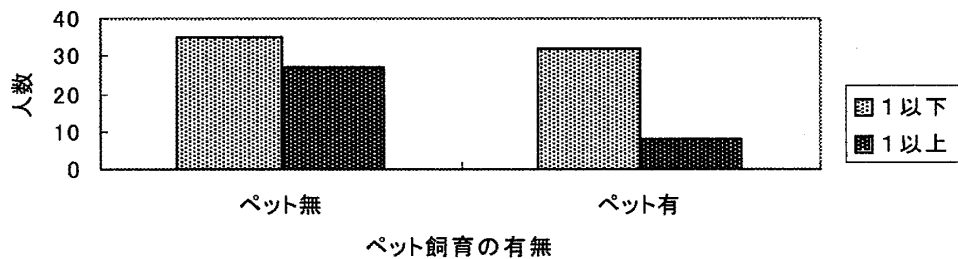


図2 夫婦間距離と親子間距離の比 (夫婦/親子間距離) とペット飼育の関係

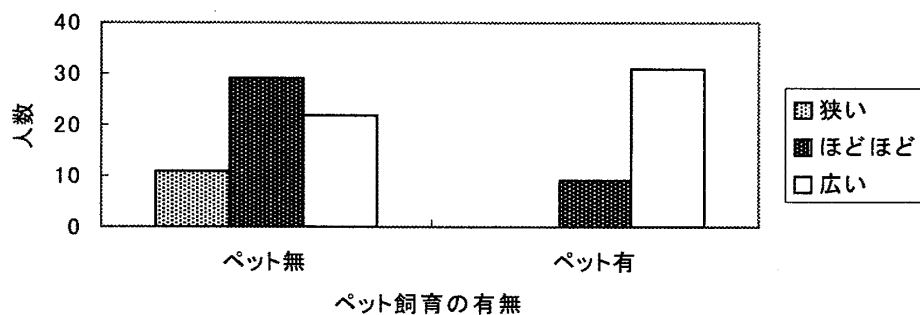


図3 領域の占有率とペット飼育の有無の関連性

心身の健康度 (KDCL得点) について

1) ペット動物の有無と心身の健康度

ペット動物を飼育している人としていない人のKDCL合計得点は図4のとおりであった。ペットを飼っていない方が心身の健康度は高いといえるが、その差は有意ではなかった ($t=1.46$, $df=104$, $p>.10$)。

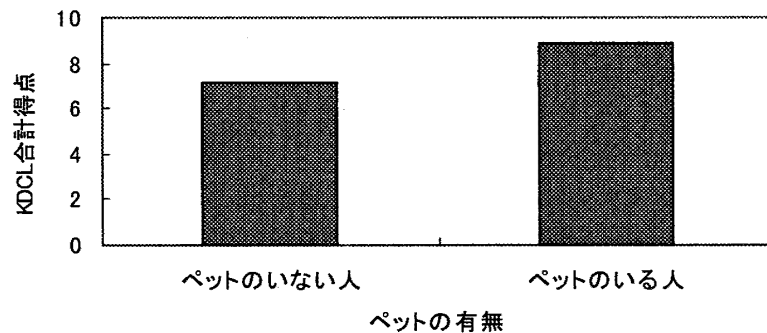


図4 ペット飼育の有無によるKDCL得点

2) 動物との結びつきなどの分析

これらの指標は、ペット動物を飼育しているものだけの分析になり、被験者数が少ないため、統計学的な分析が困難であった。

対動物態度尺度

対動物態度尺度の結果について因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った。固有値の推移や説明可能性から、3因子解が適切であると考えられた（表1）。第1因子が「不潔感（非衛生的、不潔など）」、第2因子が「（ペットへの）肯定的感情」、そして第3因子が「行動的な嫌悪感」と解釈された。

1) 対動物態度尺度の各因子得点と心身の健康度

対動物態度尺度の各因子得点と心身の健康度の相関を分析したところ、行動的嫌悪と健康度の間に有意な相関が見られた ($r=.24$, $n=104$, $p<.05$)。

2) ペット動物への嫌悪感感情と心身の健康度

対動物態度尺度の総得点（ただし、4, 7, 9, 12, 13を反転項目とし、得点が高いと動物が苦手であるという尺度化をした）によるペット動物への否定的な感情と心身の健康度について分析した。動物嫌悪尺度得点が平均より高い群（動物への嫌悪感が認められる：動物嫌悪群）と、低い群（動物に対する肯定的な感情が認められる：動物肯定群）でKDCL得点を比較した。結果は図5のとおりであり、動物嫌悪群の方が有意に心身の不健康度が高いといえる ($t=2.32$, $df=104$, $p>.05$)。

ペット動物が家族の心身の健康におよぼす影響 (1)

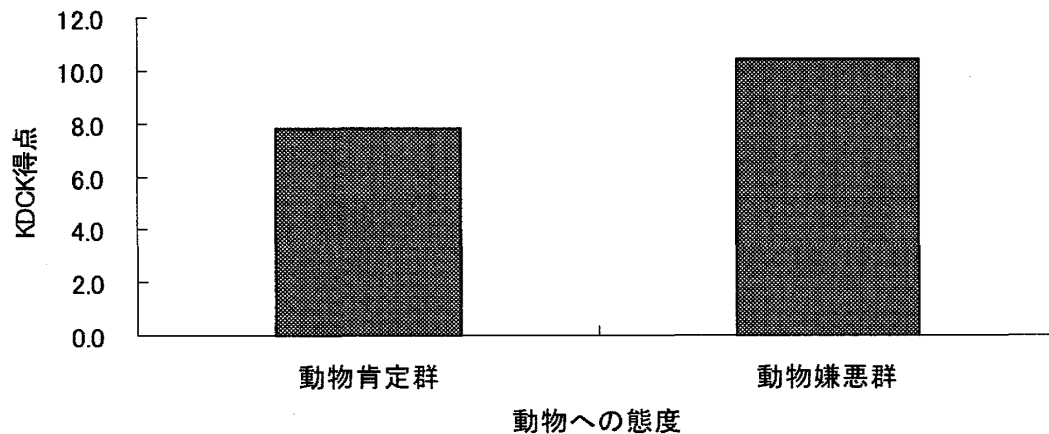


図5 動物に対する感情と心身の健康度

ペット動物への感情（飼い主感情尺度）について

飼い主感情尺度の因子分析結果を表に示す。2因子が抽出された。第1因子は、ペットへの愛情の因子で、第2因子はペット動物飼育における苦勞などの因子であるといえる。動物飼育者の数が少ないため、これ以上の分析は行わなかった。

考 察

本研究の結果、ペット動物飼育の有無と心身の健康度に明確な関係は見いだされなかった。ペット動物に対する嫌悪感・抵抗感、特に行動面での嫌悪感と精神的不健康度の間に統計的に有意な関係が見いだされた。本研究では、ペット動物飼育の有無とは関係なく、ペット動物への感情が心身の健康度を規定していたといえる。

心身の健康に対するペット動物の効果について研究する場合、動物への態度や感情は大きな要因であり、そのチェックが必要であるといえる。動物介在療法などを実施する場合は特に重要であるといえる。

本研究では、動物への嫌悪感と心身の健康度の関係が見いだされたが、それは動物への嫌悪が不健康を導き出すと解釈することもできるが、動物への嫌悪は精神的不健康の表れの一つであると解釈することもできる。今後、動物への感情と心身の健康についてより精密な分析が望まれる。

また、本研究では過去の動物飼育経験について検討しなかったが、それは現在の動物への感情や態度を導き出す可能性もあり、今後検討する必要がある。

文 献

- 安藤孝敏・児玉好信・長田久雄 2000 ペット動物との一体感尺度の作成 日本健康心理学会第13回大会発表論文集, 232-233.
- 葉賀 弘 1988 うつ病チェックリスト (KDCL) の作成とその臨床的応用に関する研究 京都府立医大誌, 97, 125-141.
- 葉賀 弘 2000 質問紙法による大学生の精神保健に関する調査報告 関西大学心理相談室紀要, 1.
- 亀口憲治 2003 家族のイメージ 河出書房新社.
- Siegel, J.M. 1990 Stressful life events and use of physician services among the elderly: the moderating role of pet ownership. *Journal of personality and Social Psychology*, 58, 1081-1086.
- Straede, C.M. & Gates, G.R. 1993 Psychological health in a population of Australian cats owners. *Anthrozoos*, 6, 30-42.

(OKUBO Junichiro)

謝辞：本研究は、猪俣亜矢さんが帝塚山大学人文科学部に2003年度卒業論文として提出したものの一部を加筆訂正したものです。発表を承諾していただいた猪俣さんに感謝の意を表します。